

(対象事業：先進的な展示・教育普及手法の開発等の事業)

事業名：八郎潟干拓事業を次世代に伝える教育教材開発事業

事業者：八郎潟干拓事業教材開発委員会

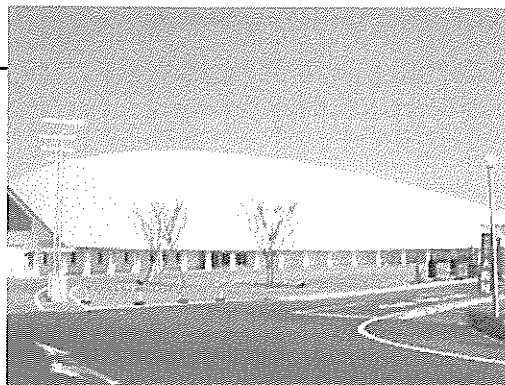
連携事業館名：

住所：秋田県南秋田郡大潟村字西 5-2

TEL：0185-22-4113

FAX：0185-22-4115

HPアドレス：<http://www.ogata.or.jp/ac/museum/>



①施設概要

日本最大の干拓事業「八郎潟干拓」を記念し、八郎潟干拓の歴史と干拓事業及び村存立の意義を後世に伝えるとともに、全国から入植した人々の営農と村づくりを紹介している博物館。平成12年4月に開館し、平成12年8月に博物館登録された。常設展示及び企画展示を通して干拓地大潟村の農業・環境・芸術文化を広く紹介している。村民と協働で様々な事業を展開していることが館の大きな特徴であり、年間を通じての自然観察会等の実施、博物館内外における学校教育の支援、館内や村内のガイド案内活動などを、村内各団体や大潟村案内ボランティア等と行っている。これらの活動を通じ、干拓地大潟村における文化交流の拡大をめざすと同時に、情報発信を行っている。

②事業の意図目的

秋田県大潟村は、日本第2の湖であった八郎潟を干拓して昭和39年に誕生した新しい村である。昭和42年度から49年度までの5回にわたる入植事業により、全国から589名が入植し、ゼロから村づくりが行われてきた。15,666haもの広大な干拓地に単独の自治体が発足したのは全国でも大潟村だけであり、現在も農村の新たなスタイルをめざして村づくりが進められている。現在は入植第1世から世代交代が急激に進み、干拓事業の意義や八郎潟干拓事業の様子、草創期の村づくりと営農について、村民の中で意識や関心が希薄になりつつあるのが現状である。

平成16年度の芸術拠点形成事業の支援を受け開発・制作した八郎潟干拓及び村の歴史に関するデジタル映像（DVD）は、村内公開により多くの村民が鑑賞し、反響を呼んだ。様々な会合や学習会で映像が活用され、村の歴史を後世に伝えていく意識が育まれつつある。

そこで今回の教育教材開発事業により、今まで開発した教材を補完し、一層充実させるべく、国営八郎潟干拓事業や村の歴史に関する資料のデジタル化により、学校教育及び生涯学習両面で利用できる学習教材を開発する。そして開発した教材の有効活用を図り、後世に永く干拓事業及び村の歴史を伝えてゆくことを目的とする。併せて、干拓事業を通じ、日本の農業や環境の未来を考える視点を醸成することを目的とする。

③事業概要

上記の目的を達成するため、本事業により以下の教材の開発と製作を行い、広く村民に周知するとともに、学校教育・生涯学習両分野で活用を図る。

1. 八郎潟干拓事業新聞記事データベースの構築

館収蔵の八郎潟干拓事業に関する新聞記事をマイクロフィルム撮影後デジタル化し、CD-ROMに新聞社ごとに収録し、データベース化を行う。

データベース CD-ROM を活用してもらうために、収録記事の見出しの目録を発行し、村内外関係機関及び村内全世帯に配布する。

2. 「八郎潟干拓と大潟村の歴史」ホームページサイトの構築

館収蔵の映像や画像、資料に加え、入植者の手記を交えた「八郎潟干拓と大潟村の歴史」ホームページサイトを構築する。サイト内容の検討にあたっては、村内でガイド案内活動を行っている大潟村案内ボランティアの会と協働で行い、また具体的なサイト構築作業は大潟村の入植者2世により行う。

大潟村の小中学校の児童・生徒にも村の歴史がわかるよう、児童・生徒対象の解説書「案内ボランティアが語る八郎潟干拓と大潟村の歴史」を発行し、配布する。

④事業の製作物及び報告書等

1. 八郎潟干拓事業新聞記事データベース

○マイクロフィルム2本に撮影後、CD-ROM8枚に分けて新聞社別にデジタル収録。

収録した新聞記事数と年代は以下の通り。

- ・秋田魁新報（昭和27年～52年）2,282点
- ・河北新報（昭和28年～51年）531点
- ・読売新聞（昭和28年～52年）564点
- ・朝日新聞（昭和27年～52年）590点
- ・毎日新聞（昭和27年～52年）727点
- ・産経新聞（昭和29年～49年）86点

○収録した新聞記事の見出し目録を制作

2. 「八郎潟干拓と大潟村の歴史」ホームページサイトの構築

○ホームページURL：<http://cs.ogata.or.jp/~museum/>

○児童・生徒用解説書「案内ボランティアが語る八郎潟の干拓と大潟村の歴史」を発行

⑤参加者状況

1. 教材開発・制作の過程で関わった村民・関係者 のべ79人

○大潟村案内ボランティア会員 学習会のべ6回、参加者 のべ75人

○一般村民 4人

2. 成果物の公開 のべ60人

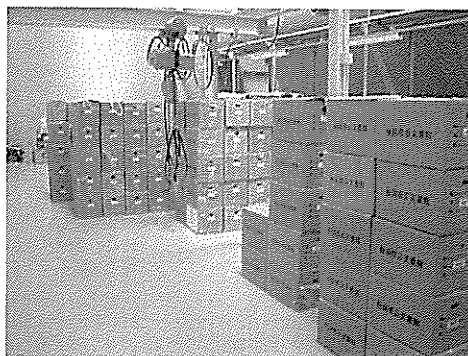
○各種会議、学習会における参加者 のべ60人

(1) 事業の実施状況について

事業実施期間は平成17年12月1日から平成18年3月31日までであった。地域住民とともに教材を開発・制作する関係上、作業が農閑期にあたる12月から3月という非常に短い期間に限られてしまった。

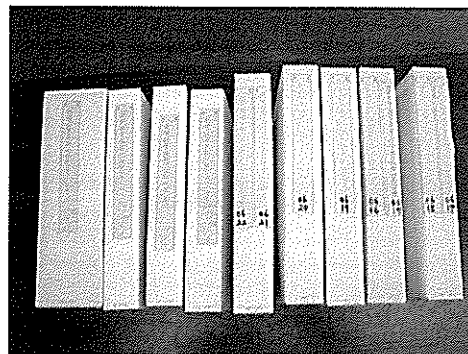
1. 八郎潟干拓事業新聞記事データベースの構築

大潟村干拓博物館には、八郎潟干拓事業と大潟村の歴史に関する資料が、段ボール箱約 650 箱に分けられ、收藏されている(写真 1)。これらの收藏資料には干拓事業についての新聞記事のスクラップブックファイルが含まれ(写真 2、写真 3)、その記事は当時の工事の様子や草創期の大潟村を各社の視点で克明に報道しているほか、入植者へのインタビュー、八郎潟や大潟村を取り上げたシリーズものの連載記事など多岐にわたり、非常に価値が高いものである。



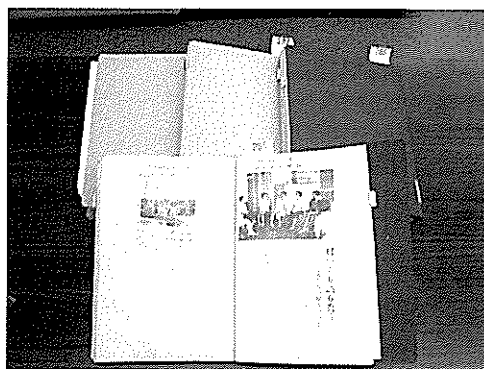
【写真 1】

これらの新聞資料は劣化が激しく、一般の閲覧に供することができるものではなかった。そこでスクラップブックに整理されている新聞記事のうち、新聞社名と掲載年月日がはっきりと判別できる記事を全て選び、その記事の見出し(3つ以内)を Excel ファイルに入力した。



【写真 2】

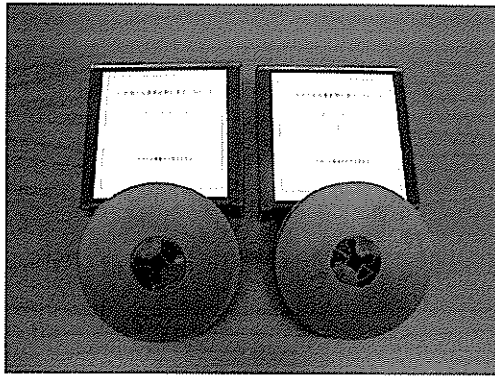
入力後、業者に委託して該当する新聞記事を全て 16mm マイクロフィルムに撮影した(写真 4)。そのマイクロフィルム画像をデジタル化し、見出しやキーワードによって検索できるアプリケーションを備えた CD-ROM に、各新聞社ごとに分けて収録した(写真 5)。CD-ROM は Microsoft 社の Windows98 以上の OS 搭載のパソコンで閲覧できる。収録された各社の新聞記事の年代と記事数は以下の通りである。



【写真 3】

- ・秋田魁新報(昭和27年～52年) 2, 282点
- ・河北新報(昭和28年～51年) 531点
- ・読売新聞(昭和28年～52年) 564点
- ・朝日新聞(昭和27年～52年) 590点
- ・毎日新聞(昭和27年～52年) 727点
- ・産経新聞(昭和29年～49年) 86点

新聞記事の使用については、上記の各社と記事の利用の許諾契約を平成18年3月10までに締結し、インターネット接続していないパソコンを用いて閲覧すること、干拓博物館のほかに大潟村内の教育研究機関(大潟小学校、大潟中学校、秋田県立大学)においても、授業や研究により閲覧ができるよう契約を結んだ。



【写真 4】



【写真 5】

完成したデータベース CD-ROM の利用を促進するため、新聞社ごとに、日付順に収録している記事の見出しを掲載した目録を制作し、関係機関及び村内全世帯に配布した。

2. 「八郎潟干拓と大潟村の歴史」ホームページサイトの構築

八郎潟干拓事業と大潟村の歴史について、今まで多くの方々に関心が寄せられながらも、分かりやすく紹介をしている文献やホームページサイトは皆無であった。小中学生の学習課題として取り上げられるケースも多く、地元の小中学校でも村の歴史に係わる部分を授業で学ぶケースが多いことから、干拓博物館を中心にガイド案内活動を行っている「大潟村案内ボランティアの会」と協働でホームページサイトを構築することにした。

大潟村案内ボランティアの会がガイド案内のために学習を開始したのは平成 13 年度にさかのぼる。内容は八郎潟干拓事業と大潟村の歴史や農業に関するふりかえりが中心で、以後、毎年 10 回程度の学習会が積み重ねられている。今まで積み重ねられた学習会を通じて、村民や来館者に伝えたいことは基本的に整理されており、今回のサイト構築においては、館に収蔵されている資料や情報を活用し、今まで学習した内容の整理とホームページを通して伝えたいことの集約、そして村の発足以降、様々な歴史的場面でのボランティア個人個人の思いをのせることにした。本年度の案内ボランティアの学習会では、1 月以降、制作途中のホームページの内容を見ながら、意見を出し合う形で進めることができた。結果的に予想以上のボリュームとなってしまった。

実際のホームページ構築作業にあたっては、干拓事業や村の歴史を若い世代に伝える趣旨の事業であることから、全てを外部に委託することは適切でないと考え、あえてパソコン操作や画像・動画処理に堪能な村民（入植者の後継者）に賃金を支払い、干拓博物館のパソコンにより一緒に作業を行う形ですすめていった。これらの作業を通じ、後継者世代にも村の歴史について知っていただきたいとの意図がある。制作にあたっては、画像処理を高速で行う関係上、アップルコンピュータのPowerMacintosh G4 Dualを用い、主に使用したホームページ製作用のソフトウェアはAdobe Goliveである。なお、ホームページのファイルのサーバーについては、保守も含めて大潟村役場に無料で提供いただいた。

完成したホームページサイトは以下である。また、インターネットに接続していないパソコンでも閲覧が可能になるよう、ファイルをCD-ROMに保存し、貸し出しに対応できるようにした。

<http://cs.ogata.or.jp/~museum/>

また、ホームページの内容がやや難しい面も含まれていることから、小中学生を対象に、ホームページの中のエッセンスをまとめた「大潟村案内ボランティアが語る八郎潟の干拓と大潟村の歴史」という小冊子を制作し、村内の小中学生に配布した。ボランティアの似顔絵を登場させ、会話形式で村の歴史についてわかりやすく説明するスタイルが、大きな特徴である。

3. 開発した教材の周知、公開、活用

本年度の事業については、3月20日付け秋田魁新報朝刊に大きく掲載され、報道された。反響は大きく、報道後3日間で、村内外から6件の問い合わせがあった。事業の詳細な内容については、大潟村干拓博物館だより第4号（平成18年3月31日発行）および広報おおがた4月号で紹介される。

開発した教材の成果物は、定例大潟村教育委員会、大潟村社会教育委員会、大潟村干拓博物館協議会等の会議で紹介し、学校教育・生涯学習両面での利用が検討された。新聞データベースについては大潟村公民館で、案内ボランティアの学習会及び総会で活用された。

（2）地域との連携について

大潟村干拓博物館では平成12年の開館当初から、地域住民との連携と協働により企画展示や教育普及事業が行われてきた。今回の事業も、入植者である地域住民の方々や干拓博物館協議会委員が「八郎潟干拓地の歴史を後世に伝える」一環として博物館に提言されてきた事業内容であり、今回、文化庁のご支援により実施できたものである。

具体的な連携・協働については、以下の3項目に集約できる。

1. 八郎潟干拓事業教材開発委員会

学校教育・生涯学習関係者及び村民が関わり、「八郎潟干拓事業教材開発委員会」を組織し、地域ならではの歴史文化資源を後世に伝える手法を検討した。本委員会の目的は、「八郎潟干拓事業及び大潟村の歴史資料を活用し、学校教育・生涯学習両分野における教育教材を開発して後世に永く歴史を伝える」ことであり、具体的に「村の歴史に関する資料の収集整理と調査研究」「資料の教育分野への活用と教育教材の開発・制作」を行う。委員は教育長、教育次長、大潟小学校長、大潟中学校長、社会教育主事、干拓博物館協議会会長・副会長、大潟村案内ボランティアの会会長・副会長、干拓博物館学芸員で構成されている。

2. 大潟村案内ボランティアとの協働によるホームページ制作と児童・生徒用解説書の制作

大潟村案内ボランティアは発足4年目、入会する会員が年々増加し、現在会員23名で活動している。本年度は約80回、約1,800人ものの方々に対し、干拓博物館を中心に村内全域でガイド案内を行ってきた。日頃よりこれらのガイド案内を通じて、大潟村の歴史や現在農業・環境の状況、入植者の思いなどを来館者の要望に応じて多角的に紹介している。地域住民が地域の歴史を自ら紹介し、後世に伝えることができるよう、入植者の直接の

気持ちや伝えたいことを、案内ボランティアの学習会を通じてふりかえり、集約し、ホームページに掲載できた。また、学習会で取り上げられた事項やホームページの内容のエッセンスを、児童・生徒用解説書「案内ボランティアが語る八郎潟の干拓と大潟村の歴史」としてまとめることができた。

3. 入植者の農業後継者がホームページ制作に従事

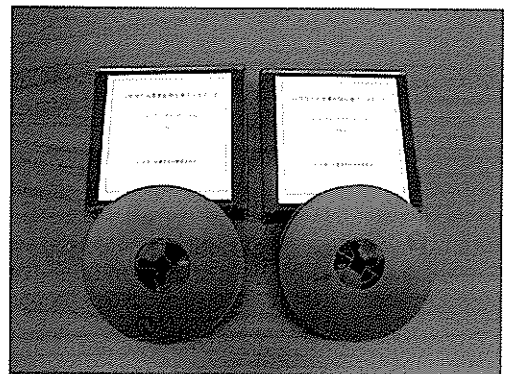
ホームページ構築の実際の作業において、干拓事業や村の歴史を若い世代に伝える趣旨の事業であることから、外部に委託することなく、あえてパソコン操作や画像・動画処理に堪能な村民（農業の後継者）にお願いし、賃金を支払い、一緒に作業を行う形ですすめていった。今回の事業の趣旨を十分に理解し、そして情熱をもって作業をすすめていただくことができた。

（3）成果物について

1. 八郎潟干拓事業新聞記事データベース

収録マイクロフィルム及びCD-ROM

記事は全て 16mm マイクロフィルム 2 本に収められ（写真 6）、デジタル化し、新聞社ごとに CD-ROM8 枚に収録した（写真 7）。収蔵記事の目録は 74 ページの冊子にまとめた。



【写真 6】



【写真 7】

2. 「八郎潟干拓と大潟村の歴史」ホームページサイト及び児童・生徒用解説書

ホームページは【<http://cs.ogata.or.jp/~museum/>】で公開している。児童・生徒用の解説書は「案内ボランティアが語る八郎潟の干拓と大潟村の歴史」と題し、カラー8ページにエッセンスをまとめた。

（4）参加者の反応

データベースCD-ROMを各種委員会の場で公開した際には、「貴重な資料をこれで保存し、有効活用できる」「教育の現場での活用を」「学校の授業で利用できる」などの声が寄せられ、「昨年度開発した映像と組み合わせて、もっと充実して資料が閲覧できる工夫を」と

のご意見もあった。また新聞で報道されてからは、「いつから閲覧できるのか」「もう見ることができるのか」などの声が寄せられた。公民館における大湊村案内ボランティアの学習会の場では、プロジェクターを通して紹介した記事を参加者が熱心に読み、当時の農業や生活の様子、入植当時に取材を受け答えたことが記事になっていることをふり返ることができた。「今後案内ガイドをする上でも、ボランティア自らが歴史を学ぶ上でも非常に貴重な資料がそろった」「全部の新聞記事を読んで勉強したらガイドは大丈夫だ」「全部印刷してくれないか」などの意見が寄せられた。今後の一層の活用が期待される。

ホームページについては、案内ボランティアが学習会で検討した事項がだんだん形になって現れる様子を見ながら、充実させて行く形で制作することができた。比較的高齢者で構成されているボランティアの間でもホームページ上で表現されたことにより、ホームページに興味関心を抱いたり、「このまま終わらせないで、もっと充実させていく責務が私たちにあるのではないか」等の声が学習会では寄せられ、今後一層の充実が期待されるものとなった。また、具体的に手記という形で個人が文章にまとめ、公開したことについては、学習会の参加者が「実名でかまわない、私たちの気持ちを伝えてほしい」と言ったのが印象的であった。ホームページの内容のエッセンスを子供たちに紹介する解説書「ボランティアが語る八郎潟の干拓と大湊村の歴史」は、ボランティアの似顔絵を登場させた形が新鮮で、試しの印刷物をボランティア会員に校正に渡したところ、「孫からそっくりといわれた」「今までになく、すごくわかりやすい」等の声が寄せられ、学校での配布時には子供たちの多くが興味関心をもって読んでもらえるものと期待される。

（５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

今まで村の歴史を学び、語り継ぐ上で貴重な資料であり、劣化が進み閲覧に供することができなかった多数の新聞記事について、これらをデジタル化したことにより閲覧し可能となった。これにより入植者である村民が、干拓事業及び入植直後に直面した様々な課題・問題について新聞記事によりふり返り、再認識する機会が与えられたことにとどまらない。案内ボランティア等の村民に代表されるように、入植世代自らが自分たちが創った歴史を子や孫に伝える意識を育むことができた。また、ホームページの世上を通しては、大湊村への入植者自らが、入植者の視点で自分たちが創った村の歴史を学び、とりまとめを行った。これにより主体的に村の歴史を学ぶ意欲が育まれ、そして多くの人々に干拓地大湊村の歴史を紹介することの意義と魅力・楽しさを伝えることができた。また制作にあたって、入植者の後継者と作業を行っていることが広く村民に知られるところとなり、父母が関わってきた村づくりの歴史について、博物館と後継者が協働でとりまとめを行うというスタイルが住民に理解された。

今後、博物館資料やデジタル化した教材を一層整え、これらを利用することで、大湊村を舞台に、村民と来村者とのあいだで、「干拓地の歴史」「干拓地の農業」「干拓地の自然環境」など、様々な文化資源を有機的に活用した交流が促進されることが期待できる。

(6) 新聞記事等

○新聞記事

秋田魁新報 平成 18 年 3 月 20 日 朝刊 地域の紹介面